

博士（工 学）アグス プラボウォ

学位論文題名

# 都市空間の再構成に関する計画的研究

## —子どもの遊び空間からみた都市空間とその計画論—

### 学位論文内容の要旨

子どもの遊びに伴う教育や人間形成の生活空間は、基本的に「家庭」・「学校」・「地域」の3つに分けられる。その他に、現代生活の中で影響力の大きい「情報・マスコミ」という4つ目の生活空間が現わってきた。これらは、それぞれに子どもを育てる大切な役割をもちながらも、わかちがたく一体となって子どもの育つ環境を構成している。さらに、近年の都市化の進展や社会生活の急激な変化に伴ない、子どもを支える生活空間も劇的に変わっている。

本論文の目的は、子どもの生活空間に視点をおきながら、広く都市圏そのものを再編する手掛かりを探ることにある。そのためにはまず、子どもの遊び要素、つまり遊びの「時間」・「相手」・「内容・方法」・「場所」について考察する。これを「子どもの視点」と呼ぶ。次に、子どもの遊び環境に関して大人たちや地域社会がどのような認識や関心をもっているのかを考察する。これを「大人社会の視点」と呼ぶ。この2つの視点から本研究を進め、最後に、既成の都市空間をいかに有効に使いこなしながら再編してゆくか、という新たな計画論や提案について考察する。

序章は本研究の位置づけであり、1950年代から現在までの、日本国内での代表的な研究の内容や論文のテーマをピックアップし、主たる論文のキーワードをあげ、グループ化を行っている。研究の視点の流れには、3つのパラダイムシフトが見られる。(1)課題の変化、量から質へのシフト、(2)視点の変化、物理的なものから社会的なものへのシフト、(3)方法の変化、供給から再構成・活性化へのシフトがあげられる。こうしたパラダイムシフトを前提とし、「子どもの視点」と「大人社会の視点」という両軸からの論考の視点に立脚することを、本研究の特徴としている。

第1章は調査の概要であり、調査対象地区の選定、調査の方法などを述べる。調査対象地区は、札幌市における、A 中央小学校区(都心部)、B 北園小学校区(既成市街地)、C 上野幌東小学校区(ニュータウン)、D 東米里小学校区(郊外)を選定した。

第2章では遊びの本質に関し、子どもの成長に対する遊びの意味と役割に関するこれまでの理論や学説を整理した。さらに、現代の子どもの遊びの問題点として、(1)遊び時間が十分にとれない、(2)遊ばない子、「遊べない」子の増加、(3)創造性や冒険性、活動性の欠乏、(4)子ども同士での連帯感や人間関係の豊かさの喪失、(5)遊び場の減少、を本研究の主に立脚する問題意識として指摘している。

第3章では子どもをめぐる社会状況に関し考察し、従来のような地域社会の一員としての子どもの位置づけが変化していることに着目し、現代っ子のライフスタイルや大人社会の意識の現状について整理している。特に、現代っ子は、大人や地域社会への疎遠化と同年齢の仲間への同調性という特性を示す一方で、大人社会では、子どもの遊びに关心を持たない、過度の責任の負担、過保護、制約と規制といった意識がはたらいていることがわかる。

第4章では都市における子どもの遊び空間に関し、都市部の遊び場の実態と計画・整備の現状を整理する。遊び場の実態に関し、自然やオープンスペース、空き地、道路などという自由に使える遊び場は、減少しつつあることや失われた遊び場を施設化し、再現しようとする手法が現行の都市計画における考え方の主流であることを指摘し、更に、計画・整備の現状の問題として、(1)量の優先、(2)施設の規模、内容、計画のアプローチが画一的であること、(3)過度の禁止事項などを挙げている。

第5章ではソフト面の遊び要素の把握に関し、遊び要素「時間・相手・内容」を分析・考察する。それらの特徴を次にまとめる。(1)教育システムによる均質化により、均質で類似した遊び環境を持ち、遊びの相手は昔の「縦型」年齢構成を持つ地域的集団から、「横型」の学校的へ変化している。さらに、遊び時間の使い方も、課外活動が殆どであり、「フォーマル化」あるいは「組織化」された遊びで、ルール性が高く、場所性、人数の必要性を含む内容である。(2)所有率の高い自転車は日常生活や遊びに重要な役割を果たし、子どもたちの行動範囲は広くなり、児童公園の誘致圏が極めて大きくなっている。(3)ファミコン、テレビなど屋内での遊びを行う比率は、屋外での遊びを行う比率より高い。

第6章ではハード面の遊び要素の把握に関し、遊び要素（場所・空間・季節の変化など）を分析・考察する。それらの特徴を次にまとめる。(1)通学路空間が重要であり、経路選択の考え方方が子どもと大人では異なる。(2)覗しみやすさと近づきやすさが重要である。(3)公園など遊び空間の少ない地域では、学校そのものが遊びの中心になる。(4)地域内で子どもたちがつくったネットワーク空間が存在している。(5)個人的な行動範囲は、年齢及び学年によっては異なる。(6)集団的な遊びパターンは「鎖型」から「点型」へ変化している。(7)冬の遊び内容は施設規模と学校からの距離に関係し、「プレイハウスの設置」が有効である。

第7章では大人社会からみた子どもの遊び環境の現状と評価に関して、分析・考察する。それらの評価を次にまとめる。(1)「子ども社会」の中心は、「地域」から「学校」へ移行している。(2)大人は自分たちの遊び体験をと比べて、現在の子どもの遊び環境について「悪くなった」という評価をしている。(3)アメニティ空間・施設に関して、現状（満足度）と理想（重要度）にギャップを生じている。(4)社会全体の子どもに対する心配と、自分の子どもに対する心配とではその傾向は同じであるが、「心配な」度合いの順位は異なる。(5)より良い遊び環境を造るために、親と教師の視点はほぼ同じであるが、満足度や重要度の認識との間にはギャップが生じている。

結論では本研究の総まとめとして、要約を行い、それらに基づいた計画的な論考に加え、今後の課題を指摘している。

本論文では子どもの生活環境を改善・再構成するための手掛かりとして、「子どもの視点」と「大人社会の視点」とから考察した。その両者の多種多様なギャップ（差異点）とポテンシャル（共通点）によって都市空間における遊び空間のネットワーク化をする必要性と計画論を提案した。加えて、今後の課題として、「子ども」を「地域社会」に取り戻すこと、子どもの遊びを介して、「大人のコミュニティ」をつくることを指摘している。

# 学位論文審査の要旨

主査 教授 小林英嗣  
副査 教授 荒谷登  
副査 教授 越野武  
副査 教授 佐藤馨一

## 学位論文題名

### 都市空間の再構成に関する計画的研究

#### —子どもの遊び空間からみた都市空間とその計画論—

今日、都市計画の領域では、これまでの成長発展を前提とした方法論に代わり、安定した成熟都市社会の形成をめざした新たな計画パラダイムと計画論の再構築が重要課題となってきた。特に「生活弱者たち」の視点に立脚した成熟都市に関する研究が数多く展開されつつあるが、その多くは高齢者や成人の生活弱者を対象としたものであり、都市の主要な構成員である「子ども」の視点に立脚した成熟都市空間への計画的な研究は極めて少なく、今後の発展が求められている。

本論文は、子どもの生活空間に視点を置きながら、広く都市空間を再編する計画的な必要性と可能性を論じた研究であり、わが国戦後の子どもの生活空間のあり方に関する計画的視点とパラダイム変化についての史的な考察に加え、子どもの遊び空間の概念的な理解と詳細な空間利用の実態把握を行ない、以下に要約される主要な成果を得ている。

- ①都市計画学のほか都市社会学や児童心理学分野などにおける今日的知見の整理から、現代の子どもの成長と遊びの相補的な関係と現在の問題点、そして子どもの遊びの本質からみた都市空間における遊び空間のあり方とその計画的な課題を明らかにした。
- ②わが国の子どもの生活空間形成に対する計画論のパラダイムの変化と都市の近隣空間の利用実態の分析から、地区レベルの市街地空間を再編する計画には「子どもの視点」と「大人の視点」が必要であることを指摘した。
- ③都市社会の近代化の進行と共に、地域社会における子どもへの視点が大きく変化し、子どもに対する大人の意識が乖離していることに加え、子どもの遊び内容が類似化し、均質化していることを捉えた。これらの現代的な都市社会の特徴に起因する遊び空間の課題を解決する計画的な方向性として、子どもと大人社会とのかかわりを形成することの重要性に言及した。
- ④小学校区内における子どもの遊び行動の実態的分析から、通学路、遊び拠点空間、公園、学校が結びついた遊び空間ネットワークが子どもの心理的領域として存在する事を捉え、特に重要性の高い通学路を軸として地域の遊び空間ネットワークを一体的に計画し設計することの必要性と近隣社会を再生するうえでの有効性を指摘した。
- ⑤「子どもの視点」と「大人の視点」間の多種多様な差異点と共通点に基づいて、遊び

空間ネットワークを創りだすための計画と設計の原理を提案した。

これを要するに、著者は、子どもの遊び空間ネットワークの計画設計原理と地区空間の再編についての計画的な新知見を得たものであり、都市計画学ならびに住環境計画学における計画論の再構築に貢献するところ大なるものがある。

よって著者は、北海道大学博士（工学）の学位を授与される資格あるものと認める。